

青年期の若者の自己決定力とその親の自己肯定感について

Self-determination of Youths in Their Adolescence and Self-esteem of Their Parents

鴻上 亮子

Ryoko Kokami

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：若者，青年期，親，自己肯定感

Key words : Youths, Adolescence, Parents, Self-esteem

1. 研究目的

1-1. 子離れができない親の増加の問題

親子関係の問題の一つとして、子離れができない親の問題が指摘されている。例えば、高石(2012)は、我が子の履修、交友関係、進路選択、就職先などに関心を払い続け、思うような結果が得られないと、大学側に対応を求める親が増えていると述べている。また中野(2003)は、有名校への進学促進や様々な才能教育の提供などについて、親のペースで我が子を上手に調整しようとし、子どもの自然な分離をコントロールしようとする親の増加を指摘している。

親が子離れができないことは、親だけの問題ではなく、子どもに対しても影響を与えている。例えば、高石は、このように子離れできない親が増加した結果、受身で主体性に乏しく、ストレス下で葛藤を抱えきれずに行動化もしくは身体化したり、人とのコミュニケーションに困難を抱え、うまく社会に巣立っていけなくなっている若者が増えていると示唆する。また大野(2006)も、親離れをすることに罪悪感を抱き、自分の人生の新たなステージに踏み出せなくなっている若者や、子どもに自分の人生の夢の代理達成を求める親からの過剰な期待や過干渉に悩んだ末に、心身のバランスを失って臨床家の下を訪れる若者が少なからず存在すると述べる。

本研究では、子離れを、単なる親子関係の状態ではなく、一連の親子関係の過程であると考え。さらに、子離れの様相を、親子関係の過程における、親の自己にまつわる現象的過程として捉え、中村(1990)の自己過程の考え方を援用する。

1-2. 子離れできない親の自己と自己過程のモデルの援用

自己過程の考え方を援用することで、子離れを、親子関係の過程における親の自己に関する一連のプロセスとして捉え、説明することが可能となる。中村は自己過程を「自分が自分に注目し、自分の特徴を自分で描くことができるようになり、その描いた姿についての評価を行い、さらにそのような自分の姿を他人にさらけだしたり、具合の悪いところは隠したり修飾したりする一連の現象的過程」と捉えている。さらに自己を現象的過程として捉えた場合、「自己の姿への注目」の段階、「自己の姿の把握」の段階、「自己の姿への評価」の段階さらに「自己の姿の表出」の段階と4つの位相に段階的に配列できると説明する。そして「自己の姿への評価」の鍵概念として「自尊心(自尊感情)」を置いている。すなわち、われわれの行動は多くの場合、自尊心を維持し、低下しないように、あるいは、向上するように動機づけられているとしている。そして、その自尊心を維持・高揚しようとする傾向は、社会的環境や自己の認知の仕方、他者との関わり方に大きな影響を与え、それゆえに自己評価、あるいは、自尊心が自己過程の中心的存在であるというものである。

ここで「自尊感情」がどのように定義づけられてきたかを見ることによって、本研究における自尊感情の捉え方を明らかにする。自尊感情は英語のセルフ・エスティーム(self-esteem)の訳語であるが、セルフ・エスティームの尺度を作成したRosenberg(1965)は、高いセルフ・エスティームには全く異なる二つの意味合いがあると述べている。一つは、自分は他の多くの人たちよりも優れているとみなすが、自分で設定した基準に照らし合わ

せると不十分であると考えるところのある「非常に良い(very good)」であり、もう一つは、自分は平均的な人間であるが、自身の認識している自己に満足している「これで良い(good enough)」である。前者は他者と照らし合わせた自己評価的な側面であり、後者は自己肯定的、自己受容的な側面である。そして高いセルフ・エスティームとは「これで良い」を指すものであるとし、それを測るための尺度を作成したと述べている。しかし山崎 (2017) の指摘するよう、Rosenberg の尺度は、実際には「これで良い」と「とても良い」の両方を測定するものとなっているのである。この点について中間 (2016) も、Rosenberg が概念規定において自己受容的な側面を想定したものの、自尊感情を測定する過程においては自己評価的な側面が強調されてしまうと指摘し、自尊感情にはしばしば「とても良い」という感覚も伴い、その感覚の強さによっても自尊感情の得点が高められると述べている。

一方、近藤 (2007) は二つのセルフ・エスティームを構造化している。「とても良い」のセルフ・エスティームを「社会的自尊感情」と名付け、自信を含み、向上心の下支えであり、競争や努力によって高められると説明している。そして「これで良い」のセルフ・エスティームを「基本的自尊感情」と呼び、「いわば絶対的、無条件に自らの存在を認める感情である」と説明している。また、基本的自尊感情の上に社会的自尊感情が乗っているという構造を提示し、社会的自尊感情が潰れてしまったときに支えとなるのが基本的自尊感情であると説明している。

さらに中村はセルフ・エスティームを区分けすることはせず、両側面を取り入れた定義を示している。すなわち、自尊心に「自分の姿が社会的にはどのように評価されるのだろうか」という社会に照らし合わせた自己評価の要素を取り入れている。そしてその評価は「一般にある基準より優れているか劣っているかの段階にとどまるのではなく、自分としてはそれで満足できるのかどうかにまで展開する、自己の現状に満足し、自信をもつ程度」であると述べている。

以上の議論から、本研究では自尊感情を、自己肯定的な要素と他者比較による自己評価の要素を兼ね備えた概念であると考え、訳語を「自尊感情」という言葉に統一する。

ところで、中村の、一般的に人は自尊感情の低下

には抵抗し、現状維持ないし高揚の傾向をもつという見解に従うと、自尊感情の高い母親は自己の現状に満足しており、自信をもつ程度が高いため、自力で自己の評価を上げる見込みがあるために、現状維持ないし高揚の手段として自力で自己の評価を高めようと考えられる。たとえば、自らの運動能力や知的能力を研鑽するなどによってである。一方、自尊感情の低い母親は自己の現状に満足しておらず、自信をもつ程度が低い。そのために現状維持ないし高揚の手段として自力で自己の評価を上げる見込みが持たず、自分以外の手段を用いようとする可能性が高い。

ここに「親から子どもへの同一視」という要因を加えることによって理論的な繋がりが明確になる。同一視とは、もともと Freud, S.によって提出された防衛機制のひとつである。柏木 (1996) は同一視について「自己と他者との間に強い情緒的結合を基礎に、その他者の性質を自分のものとしようとする、いわばあやかるうとする営みである」と述べている。「子どもから親への同一視」に関しては多くの研究がなされている一方で、「親から子どもへの同一視」に関する研究はほとんど見られない。ここで言う親から子どもへの同一視とは、岡田 (2017) の「親が子どもをあたかも自分と同じ価値観や気持ちを持つ自分の分身であり、自分自身の理想像を満たしていく存在であると捉えること」という定義を用いる。

自尊感情の高い母親は、自己の現状に満足しているために、自分自身の理想像を満たしていく存在を必要としないであろう。それゆえに過度の同一視は起きにくいと考えられる。また、自尊感情の低い母親であっても、我が子と同一視する程度がそれほど高くなければ、我が子以外の手段を用いて自己の評価を高める可能性がある。たとえば自分の持ち物や夫の家柄や地位などによってである。一方、自尊感情が低く、子どもを同一視する程度が高い母親は、子どもの人生と自分の人生を重ね合わせる可能性が高く、子どもをコントロールしようとし、子離れしにくいであろうと考えられる。「子離れが下手な母親とは、子どもに執着することによって不安を紛らわそうとする大人でもある」とする畠中 (2003) の主張は母親の低い自尊感情を示唆していると言えよう。また鎌田 (2002) は、子離れできない親を「子どもが自主的に自身の課題をこなしてくのを見守らずに、子

どもの課題に無断介入していく親」であり、それは「親が抱く子ども像に子どもを近づけたい、あるいは子どもを親の所有物のように意のままに動かしたい、と言う支配的目的が親の側に潜んでいるからである」と述べているが、これは子どもを同一視する親の姿である。

1-3. 目的

子離れは一朝一夕で行われるものではなく、村本(2010)が言及するよう、巣立ちは子どもの分離—固体化のエピソードとして比較的早い時期から感じられるものであり、徐々に進行していくプロセスである。しかしながら、子離れの様相を母親の語りから探った研究(渡邊・恒吉:2015, 濤岡:2020)はあるものの、子離れを過程として捉え、それを時間軸で追った研究はこれまでに見当たらない。その過程を明らかにすることは、根ヶ山(2006)の言う「離れつつ保護するという矛盾を背負った」子離れの道しるべとなりうる。

方法

[調査対象]: 大学生～社会人1年目までの子どもをもつ母親 3名

[調査期間]: 2021年5月～2021年9月

[調査方法]: 半構造化面接法によるインタビュー調査

[調査内容]: 子離れを感じた出来事やきっかけについて、対象者の経験や感想を振り返って語ってもらう。

[分析方法]: 本研究では母親の子離れのプロセスを見ていくことを目的としているため、「時間を捨象せずに人生の理解を可能にしようとする文化心理学の新しいアプローチ」であり、「構造ではなく、過程を理解しようとするアプローチ」である複線径路・等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: 以下TEA)による質的分析(安田・サトウ, 2012)を用いる。TEAの背景には、人間の行動・選択や経験は多様であり、その径路は複線的に捉えられる一方で、どこまでも末広がり的に多様なのではなく、その場に特有な歴史的・文化的・社会的な影響を受けることによって、ある定常状態に等しく辿り着くものであるという考え方がある(安田, 2005)。またTEAでは、研究者が関心をもった経験を等至点として設定し、その等至点となる事象を経験した人を対象とする。異なる対象者が同じ経験をすることは稀であるが、類似の経験

を研究者が自身の責任において焦点化しまとめて捉えることには意味があるとしている。今回、TEAの手法に則り、調査対象者にはそれぞれ3回のインタビューを実施する1回目の面接の語りから研究者の視点で描かれたTEM図を、2回目で研究者と対象者のお互いの見方の交換から描かれたTEM図を作成することができる。そして3回目では、研究者と対象者の視点・観点を融合したTEM図を作成することができる。また、対象者に関して、TEAにおいて提唱されている1・4・9の法則(1人:個人の径路の深みを探る, 4±1人:経験の多様性を描く, 9±2人:径路の類型を把握する)(荒川ら,2012)に従い、対象者を3名とすることで、経験の多様性を描くことができる。

2. 研究実施内容

オンラインで開催された日本質的心理学会第17回大会を聴講し、研究方法として用いるTEAについての理解を深めることができた。

また、親離れや教育虐待などに関する多くの文献を読むことで親子関係に関する知見を深めることができた。

さらに3月専攻内で開催された修士論文構想発表会にて発表を行い、様々な指摘を得て、より詳細な研究計画へと修正を行った。

3. まとめと今後の課題

今年度は、親子関係に関する文献や先行研究を読み、知見を深めると共に、本研究の焦点を「母親の子離れのプロセス」に絞ることができた。また研究方法に関しては、様々な研究方法の中から研究内容に適したTEAに定めることができた。

今後の課題としては、先日大妻女子大学生命科学研究倫理委員会に提出した研究計画の承認が得られ次第、調査を実施する。

5～6月に3名の1回目のインタビューを行い、TEM図を作成する。7月～9月で2回目、3回目のインタビューを行い、TEM図を完成させる。10月に完成させたTEM図を分析し始める。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所令和3年度大学院生研究助成(B)(課題番号: DB2009)より研究助成を受け行う。

主要参考文献

- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ(2012).複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例. 立命館人間科学研究,25,95-107.
- 畠中宗一 (2003).「子離れが下手な親を生む現代社会」 児童心理, 57 (7), 611-616. 金子書房.
- 鎌田穰 (2002).「子離れできない親」 児童心理,56 (16), 1515-1520.金子書房.
- 近藤卓 (2007).「生きる力」を支える自尊感情. 児童心理 61 (10), 915-919.金子書房.
- 村本邦子(2010). 第4節 親子関係の発達・変容 (2): 子どもの巣立ち期の母親から見た子どもとの関係. 岡本祐子 (編). 金子書房.
- 中間玲子 (編著) (2019). 自尊感情の心理学 — 理解を深める「取扱説明書」 金子書房.
- 中村陽吉 (編) (1990). 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会.
- 根ヶ山光一 (2006). 〈子別れ〉としての子育て. 日本出版協会.
- 高石恭子 (編) (2012). 甲南大学人間科学研究所叢書「心の危機と臨床の知」第13巻 子別れのための子育て 平凡社.
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the Adolescent Self Image*. Princeton: Princeton University Press.
- 山崎勝之 (2017). 自尊感情革命 福村出版.